

霧心の哲学

—— 金森修の空間・場所論 ——

犬塚 悠

研究室紀要 第43号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2017年7月

霧心の哲学

——金森修の空間・場所論——

犬 塚 悠

本論考が素描を試みるのは、「金森修の空間・場所論」である。しかしこのようなテーマ設定は、本当は金森先生の意に反するかもしれない。なぜなら後に見るように、先生自身「一個人に属する思想」という思想の捉え方に反対されていたためである。先生はフランス認識論の研究と並行して〈認識主体なしの認識論〉の構築を目指されていた。先生の場所論はこの試みの一環であった。そしてこの試みは、先生が生きた20世紀後半以降の思想的潮流・社会情勢から切り離して考えることが出来ない。よって、先生の意に沿う形で改めて表現するなら、本論考のテーマは「金森修という人を通して現れた、ある時代の空間・場所論」であるといえよう。

フランス留学後の金森先生が日本での研究を本格化する1990年代は、環境問題が国内の哲学・倫理学の中で議論されるようになった時期¹⁾であり、先生の空間・場所論もこれに対する応答としての側面をもっていた。1993年に金森先生は、「主体性の環境理論とその倫理的射程」を執筆している²⁾。この論考の中で先生は、カンギレムの「生命とその環境」を手掛かりに、ラブラーシュの地理学やユクスケルの生物学に現れている「主体性の環境理論」を見出す。それを基に議論は、ダニの環境世界も人間の環境世界も優劣をつけたいことを認めることで、環境倫理学における人間非中心主義を新たな視点から支持する方向へと展開される。

このように生物と環境との相互作用を見ていた先生は、その後長期にわたって外部・内部の問題を扱っていく。その初期のもので重要であると考えられるのが、1995年の「内も外もない世界へ」である。これは一応はフーコーやアブレスに着想を得たものとされているが、金森先生にとってこの著作のどこまでが外から得られた考えでどこからが自分の独創であるかといった問いは「完全に無意味な虚構」³⁾であった。むしろこの著作の主題は、そのような問いの前提となる「内部と外部」や「内面と外面」といっ

た〈外部問題〉を他我問題と同様に疑似問題であると示すことであった⁴⁾。

ある特定の時代におけるある特定地域において、複数の、だがある限定性をもった人間集団が織りなす問題群には、個別的特権的認識主体を中心的準拠としてたてることはないながらも、ある集団的な方向性をもった言説空間が存在するのであり、そこには人間全体でも個人でもない、ある中間的な位相をもつ認識集団の輪郭画定の可能性がある。⁵⁾

例えば、一般に内面の問題とされる愛や憎悪といった「情念の世界」できえも、それらが現れる範囲を一人の内面に限ることは不可能である。「君という存在は、一時期〈愛〉という概念が人類から包括的に忘却されないように、ひょっとすると概念自身がその延命を望んだために、君のなかに生起したある事件以外のものではないのかもしれない」⁶⁾。このような世界の捉え方は、先生にとって「〈認識主体なしの認識論〉という、かなり射程の大きな問題構制の序論として機能しうるかもしれない着想」⁷⁾の始まりであった。

ただし先生は〈私〉というものを完全には否定しなかった。続く「私鏡という破片」(1997年)において主張されるのは、〈私〉がどこにもいないということではなく「〈私〉はところどころにいるということ」である⁸⁾。〈私〉とは、生動的な経験を後から一つのまとまりにおいて捉え直すときに用いられる形式のようなものである。何かに没頭している最中には〈私〉は存在しない。このことは、実は〈私〉は意識や身体の〈内部〉にあるのではなく、いわば〈外部〉にあることを示す。その〈私〉は破片のように断片的で、何らかの糸を用いて手繰ることのできるものである。

〈私〉という名の破片は、私の妻の笑顔、私がしばしば通り過ぎる街角にある看板、私が通勤で利用する駅のごみ捨て場、道ばたの石ころ、私がい古したハンカチ……のなかにある。〈私〉という名の破片は、私の妻の笑顔、私がしばしば通り過ぎる街角にある看板、私が通勤で利用する駅のごみ捨て場、道ばたの石ころ、私がい古したハンカチ……である。⁹⁾

これら一つ一つの様相は時によって変わりうる。その変化の構造を、先生は破片に付いた「鏡」という比喻によって表しており、それがタイトルの意味するものである。

〈外部〉にある〈私〉という考察は、「場所」という概念に先生を近づけていった。1996年から講演のタイトルとして「場所としての心」という表現が現れ始めるが、遺された著作で最初のもは「漏れる心、溜まる場所～有限な意味的まとまり～」(1997年初出、2000年再掲)である。「漏れる心」とは「心とは漏れを含む器官であり、それはたえず身体と世界とを恥ずかしげもなく混ぜ合わせながら、その自然な境界線から逃れ出ている」という認知科学者アンディ・クラークの言葉によるものである¹⁰⁾。先生はこれを「場所」概念と結びつけ、「場所とは、実は心の別名でもあるのだ」¹¹⁾と定義する。同様の考えは「状況と場所」(1997年)においても展開されている。これは、ハラウェイの「状況づけられた知識」やギブソンの「アフォーダンス論」などに共通してみられる「状況」をめぐる主客二元論批判の潮流を指摘し、この問題系の展開可能性のひとつとして「場所」という概念を提示した論考である。「場が生動し、場が内省し、場が意気消沈する」というように、「個的な心の内部にではなく、場所全体に住み着くような認識。そんな認識を私たちは考えることができないのか」、「なぜ〈心〉がそのとき場所自体になっていると考えてはいけないのか」¹²⁾と先生は問いかける。

1990年代の終わりごろから先生は「現代的なコミット」¹³⁾の一環として環境保護活動・思想の具体的な事例も研究するようになり、その成果は「技術的環境構成の果てに」(1998年)や「環境の文化政治学に向けて」(1999年)としてまとめられた¹⁴⁾。そして環境問題と上述の場所論とを接続して論じたものが、「場所と環境の思想に向けて」(1999年)である。この論考は先生らしい厳しい言葉で始まっている。

ある日本の哲学者は、いわゆる地球環境問題などよりも自分がこれから死ぬということがもつ意味を熟考することの方が哲学的にみて遥かに大切に思えるというような意味のことを書いているらしい。[中略]何とも情けなく、恥ずかしい思いにかられる。そんな「哲学」など、あってもなくても別にどうということはないということここではっきり確認しておきたい。¹⁵⁾

これからの私たちに求められているのは、「自分」なるものがもつ問題構成を特権化する精神ではなく、「自分」という名で仮称されているものは、身体と周辺とのやりとりの調整自体だという認識へと至る、本性的に開放化された精神」¹⁶⁾であると先生は主張する。その自覚・認識の手掛かりとするのが「場所」である。

私たちの目前を次々に通りすぎていく場所の群れから私たちは大切なものを吸い取り、同時に私たちは自分の破片を残していくとも言える。私たちの「内部」と場所という外部との境界線はかすみのようにぼやけているが、それはむしろ私たちが外に染み出しているという生動の印なのだ。ニュートンの空間を出来る限り分断して、場所として生き抜こう。¹⁷⁾

先生が提案するのは、巨大な空間の問題として私たちに理解しがたい問題となっている地球環境問題を、場所論との連携の中で捉え直すことである。「空間的な環境論から場所的な環境論への重心移動」という主張は、先生曰く環境問題に対する「私なりのアクティビズム」¹⁸⁾であった。

そして外部に宿る心という考えが結晶化したものが、2002年の「漏れた心、溜まる場所」において提示された「霧心(きりごころ)」¹⁹⁾という概念である。本論考は3節に分かれており、心論を扱う第1節、場所論を扱う第2節、そして心論と場所論の接合を図る第3節となっている。第1節は、道元、ギブソン、和歌論、アンディ・クラーク、マーヴィン・ミンスキー、フランス構造主義、ヴィトゲンシュタインなど様々な文献に言及しながら、閉じた「心」や「私」といったものの仮想性を論じている。外部から常に触発され、内部の無意識に常に左右される心のありさまを先生は霞や霧に喩える。それが「霧心」

である。

第2節の場所論では、先生はアリストテレスの哲学から地理学・文化人類学、エコロジー思想、カルチュラルスタディーズ、ポストコロニアリズムまでを総なめし、場所概念が活躍する分野の幅広さや現代的意義を明らかにした上で、どの分野においてもこの概念の「決定的な定義がなされているとはいいたくない」²⁰⁾ことを指摘する。それを場所の本質的な曖昧性によるものであるとしつつ、先生自身はハイデガーの「用具性」にヒントを得ながら、「なかにいる人の作用可能性が保証されるくらいの近きにある事物の総体を住まわせる空間、それがその人にとっての場所である」²¹⁾と定義する。

そして第3節において先生は、霧心論と場所論を連結し、「霧心が一種の場所であるかのような境地」を言語化することを試みる。「望霧のように曖昧で茫漠とし、絶えず漏れ続ける心。そしてその漏れた心が溜まる、というより、漏れて近隣に滞っているような特殊な空間様のもの、それを一種の場所だと考える」²²⁾のである。ここでは、心について内部と外部との境目を曖昧にすることに加えて、身体についても「流動的・発散的・軟体的な身体」²³⁾の構想が試みられる。ダンスに見られる空間性は「半透明の」身体空間²⁴⁾として、声は身体の一部として考察される。生理的身体は「身体という存在様式の「最も可視的な一部分」であるにすぎ」²⁵⁾ず、場所も「一種の身体」²⁶⁾と言ひ換えられる。私たちが笛の音色や人の話を共に味わっているとき、私たちの心は生理的身体から漏れ出し、共に傍らに漂っている²⁷⁾。

その後、霧心論は「場所のこころ」(2006年)においてさらなる展開を遂げた。「霧は霧でも、“朝の終わりの霧”のような心」という「朝霧の心論」が提示されたのである。その狙いは、「朝の終わりの霧のように、それを通してみてもみなくても、ほとんど変わらないような図の中に心を置いてみるということ」にあり、世界の捉え方に微妙な変化を起こすことである。例えばそれは、「木漏れ日の光の強さをまぶしいと感じる」という、光とそれを感じる主体を切り離れた世界の記述様式から、「まぶしすぎる木漏れ日という心」へという捉え直しである。

ただし、先生自身すでに「朝霧の心論」に「若干の苦しさ」を見出していた²⁸⁾。それは連想や回想が絡む場合である。例えば、木漏れ日のせいでその夏に行った海水浴の太陽のことを思い出すという光景に

ついて、「木漏れ日のまぶしさが、夏の海水浴の太陽を連想させる」を「まぶしい木漏れ日と、海水浴場での太陽という心」と言い換えることは可能なのだろうかと先生は自問する。後に望まれるのは、「この荒すぎる起動的な試みを、読者がより洗棟されたものにしてほしい」ということであった²⁹⁾。

以上の他にも、先生の空間・場所論として特筆すべきものとしては、雑誌『10+1』(INAX出版)に連載された「都市環境の文化政治学」(2002-2003年)がある。全5回の記事はそれぞれ、都市に見出される非土着的な「場所」の特異性を扱った「場所」の変幻、複数の場所をたどることによって物語を生じさせるという「場所」のナラトロジー、「近き」の中にある「都会性」を論じた「風景画」としての都市、「ぶらつき」が成立するのは田園ではなく都市であるということに着目した「都市性の夢」、そして自然と人工という対立項において田園と都市を捉えることを批判する「工学的世界のなかの都市」がある。これらに一貫して見られるのはエコロジー思想などに見られるロマン主義を批判し、過去への回帰ではなく未来を建設しようという態度である³⁰⁾。

しかしこの連載では哲学的な体系化はなされておらず、先生の場所論を代表とするものは「霧心」論であると考えられる。1997年の「私鏡という破片」と2002年の「漏れた心、溜まる場所」は、晩年の論文集『科学思想史の哲学』(2015年)の最終章としても収められた。次の一節は、この書の本文の最後を飾る一節ともなっている節である。ここに現れている〈私〉は金森先生なのか、私なのか、誰なのか。内も外もない世界に、先生の遺した言葉は今も私たちを導いている。

事実、霧心の見方をもつようになって、私は自分が少し変わったということを知っている。この少し長めのエッセイがもたらす言葉の河を通り抜けてくれた君が、ほんの少しだけ、霧心の世界に近づいてくれるように。君の体から漏れ出す霧心のなかに、ほんの少しだけ、私の面影が残っているように。それが、私の、少しだけ不^{ぼしつけ}寐な願いなのだ。³¹⁾

注

1) 加藤尚武の『環境倫理学のすすめ』(丸善)はアメリカ

- を中心に議論されていた環境倫理学を日本に紹介した本であるが、この本が出版されたのも1991年であった。
- 2) 金森修「主体性の環境理論とその倫理的射程」加藤尚武、飯田亘之編『応用倫理学研究』千葉大学教養部倫理学研究室、157-169頁、1993年。これ以前の先生の空間論としては、空間と管理・権力・政治との関係を説いた1992年の「M.フーコーのトポグラフィー」(『言語文化論』筑波大学現代語・現代文化学系、36：17-33頁)が挙げられる。
 - 3) 金森修「内も外もない世界へ」『情況』情況出版、6(5)：28-37頁、1995年、29頁。
 - 4) 同上、31頁。
 - 5) 同上、32頁。
 - 6) 同上、34頁。
 - 7) 同上、36頁。
 - 8) 金森修「私鏡という破片」『情況』情況出版、8(2)：6-15頁、1997年、13頁。『科学思想史の哲学』(岩波書店、2015年)では「〈私〉は、私の身体との一種の近接性を保ちながら、ところどころにいるということだ」と加筆修正されている(346頁)。
 - 9) 前掲、1997年、13-14頁。
 - 10) 金森修「漏れる心、溜まる場所～有限な意味的まとまり～」『まちづくり・ひとづくり提言集』十勝環境ラポラトリー、1：42-44頁、2000年(初出『十勝毎日新聞』1997年9月26日)42頁。
 - 11) 同上、44頁。
 - 12) 金森修「状況と場所」『情況』情況出版、8(9)：100-110頁、1997年、109頁。
 - 13) 「僕の専門は科学思想史一般で、19世紀の生命科学を研究してきたのですが、10年ほど前に、現代的なコミットもすべきだと思って、科学社会学的なものもずいぶん調査しました。その時、アメリカの環境保護思想の歴史も調べました。」(金森修、綿貫礼子「対談“エコロジーの文化政治学”から「平和」を紡ぐ」『季刊軍縮地球市民』明治大学軍縮平和研究所、6：33-45頁、2006年、33頁)
 - 14) 金森修「技術的環境構成の果てに」『iichiko: quarterly intercultural: a journal for transdisciplinary studies of pratiques』、日本ベリエールアートセンター、48：4-18頁、1998年；金森修「環境の文化政治学に向けて」『科学』岩波書店、69(3)：219-226頁、1999年。
 - 15) 金森修「場所と環境の思想に向けて」『岐阜を考える』岐阜県産業経済振興センター、100：90-94頁、1999年、90頁。
 - 16) 同上、90頁。
 - 17) 同上、92頁。
 - 18) 同上、93頁。
 - 19) 金森修「漏れた心、溜まる場所」『感性哲学』日本感性工学会感性哲学部会編集委員会、2：17-44頁、2002年、27頁。
 - 20) 同上、30頁。
 - 21) 同上、33頁。
 - 22) 同上、35頁。
 - 23) 同上、36頁。
 - 24) 同上、37頁。
 - 25) 同上、38頁。
 - 26) 同上、38頁。
 - 27) 同上、40-41頁。
 - 28) 金森修「場所のこころ」南博文編『環境心理学の新しいかたち』誠信書房、47-65頁、2006年、63頁。
 - 29) 同上、63頁。
 - 30) 今回、金森先生がいくつかの著作で挙げられている「環境の文化政治学」や「環境政治学」について検討することは出来なかった。「科学技術と環境倫理」(『環境情報科学』環境情報科学センター、40(3)：4-8頁、2011年)では、環境問題が個人を超えた集団に関わり、対自然であるとともに対人間問題でもあることから、「環境倫理学は〈環境政治学〉として再定位されなければならない」(7頁)と主張されている。
 - 31) 金森、前掲書、2015年、381頁。